

紹介

条里制・古代都市研究会編

『古代の都市と条里』

本書は、日本古代の条里制や都城・地方官衙の研究の第一線に立ってきた条里制・古代都市研究会の発足三十周年を記念し、文献史・考古学・歴史地理学などの学智を結集して刊行された書籍である。一九八五年の発足時同会は「条里制研究会」であり、二〇〇七年に「条里制・古代都市研究会」と改称している。その間、年刊の雑誌『条里制・古代都市研究』（旧名『条里制研究』）以外に一九九七年に『空から見た古代遺跡と条里』、二〇〇九年には『日本古代の郡衙遺跡』をそれぞれ発足十周年・二十五周年を期して刊行してきた。日本古代の土地制度の根幹たる条里制は言うまでもないが、古代都城をはじめとする都市も古代史研究の重要な素材である。本書は主に条里遺構に焦点を絞った前掲二書とはやや趣を異にし、文字通り「条里制」と「古代都市」の両輪を備えた書籍となった。

構成は古代都市編と条里編の二編に大きく分かれる。古代都市編は古代都市・地方都市・五畿七道の国府の三部構成、条里編は条里（総論）と五畿七道の条里の二部構成をとる。古代都市の章では飛鳥京から平安京までの宮都と離宮について、地方都市の章では大宰府・多賀城・斎宮についてそれぞれの専門家が言及する。条里の総論（金田章裕）では、条里地割の変遷を荘園の条里プランまでを視野に入れ、通時的に描写している。五畿七道の国府と条里を取り上げる章では、ともに畿内と七道それぞれに独立した項目を立て、旧国単位で関連遺構を遺漏なく取り上げている。また、執筆陣の大半が各地域の埋蔵文化財センターや博物館で文化財保護に直接携わる埋蔵文化財担当職員や学芸員、或いは当該地域に深くコミットした研究に従事する大学教員であるのは特筆されよう。以上のような網羅性と個々の遺跡に密着した編集方針こそが専門学会の編著ならではのものであるといえる。

また、最新の発掘成果や研究を貪欲に取り入れているのも特色である。目に留まるものを幾つか選ぶと、飛鳥京の立地と百済

の都城との関連（井上和人）、大宰府客館跡地と多賀城の嚮応施設との関係（鈴木拓也）、八世紀後半の斎宮より見られる二重の柵列（榎村寛之）、平城京の十条大路かと話題になった下三橋遺跡への言及（山本崇）、東大寺領大井荘の成立に関する新出史料を用いた荘域の再考（矢田勝）などが挙げられようか。一般書よりの読みやすい体裁・文体と最新の研究成果への目配りの両立は、本書を一層優れたものにしてている。さらに、本書の際立った特長は、図表の豊富さにもかかわらず、持ち運びに簡便なサイズと、内容に比して安価な価格を実現していることである。関連諸分野への専門的関心をお持ちの方はもとより、日本古代史への一般的関心や古代遺跡のフィールドワーク等の目的にも本書は適しているように、広く一読を勧めたい。

（A5判） 三三四頁 二〇一五年四月

吉川弘文館 税抜三〇〇円）

（鈴木健吾 京都大学大学院

文学研究科 修士課程）